

中島敦「牛人」の天あるいは天命観

荒木, 雪葉
西九州大学 : 非常勤講師 | 西南学院大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/20620>

出版情報 : 地域健康文化学論輯. 1, pp.71-83, 2009-09-30. Japan Institute for Community, Health, and Culture
バージョン :
権利関係 :



中島敦「牛人」の天あるいは天命観

荒木雪葉

序章

この論文は、原典である『春秋左氏伝』との比較という方法を用いて、中島敦の作品「牛人」の天あるいは天命観を考察するものである。中島敦「牛人」のテキストは『中島敦全集第一巻』(筑摩書房、昭和 51/62 年)を、『春秋左氏伝』のテキストは竹添進一郎『漢文大系(十一) 左氏會箋』(富山房、1911 年)を用い、国立編譯館主編『十三經注疏 第十五冊 春秋左傳正義』(新文豐出版公司、中華民國 90 年)を参考として用いる。また必要に応じて、筆者による書き下しや現代語訳を附する。

上記の中島敦全集に付された解題によれば、「牛人」は「盈虚」とともに「古俗」と総題され、単行本『南島譚』に収められて初めて発表されたものであり、執筆年代および本文を決定する手掛かりになる材料はないという。また素材を『春秋左氏伝』に取っているため、「弟子」を執筆中に生じた副産物でもあろうか、と推測されている¹。

ここでふれられているとおり、「牛人」は『春秋左氏伝』(以下『左伝』と称す)に材を取る。魯の昭公四年から五年にかけて豎牛という人物が叔孫氏を攪乱した事件がこれである。なお豎牛の乱については『春秋左氏伝』のみが伝えており、『春秋公羊伝』および『春秋穀梁伝』は『春秋』の経文である「冬、十有二月乙卯、叔孫豹卒す。」を記すのみで伝は記されていない。

「牛人」を単体で扱った先行研究は、管見の限りでは少ないようである。木村瑞夫氏は『論攷 中島敦』(和泉書院、2003 年)に収められた「中島敦『古譚・古俗』論 一統一性と分割性に関する考察一」において、『古譚』としてまとめられた「狐憑」「木乃伊」「文字禍」「山月記」、また『古俗』としてまとめられた「盈虚」「牛人」という六作品に共通するテーマとして次の二点を挙げられた。一つは主人公が『生』の永遠化を希求しているということ、もう一つは「人間の努力や能力を超えた『押付けた』者」の悪意によって『生』の永遠化」という願望が抹殺されてしまうことである。そして叔孫豹が悲劇の最期を迎えたのは「生殖という人間の根源的な本能に起因」する運命であったとしている²。また渡邊一民氏は『中島敦論』(理想社、2005 年)において、「凄惨ともいえる『牛人』のテキスト」を「神の嗜虐性」と結び付けて考察し、叔孫豹が最後に感じる「世界のきびしい悪意といった様なものへの、遜った懼れ」を「神の嗜虐性の全面的な容認である」と解釈して、そこから 1942 年の中島敦をめぐる「ある意味では人生の失敗者」であり「時代はますます閉塞し、そこに作家としての希望を見出すことがいっそう困難となっていた」という状況を読み取っている³。

また「牛人」を直接に扱わないが、本稿と近似したテーマで書かれたのが、勝又浩氏の

¹ 参考：中島敦『中島敦全集第一巻』(筑摩書房、昭和 51/62 年) p.573

² 参考：木村瑞夫『論攷 中島敦』(和泉書院、2003 年) p.65～p.89

³ 参考：渡邊一民『中島敦論』(理想社、2005 年) p.164～p.173

『中島敦の遍歴』（筑摩書房、2004／2005 年）に収められている「中島敦の天」である。勝又氏は「狼疾記」から『古譚』、「弟子」を経て「李陵」に至る過程を、「十一歳のとき既に崩壊しているのだと知らされて、彼を恐怖と怒りと不信に突き落とした中島敦の天」が「再構築され」る過程だと読みとった。中島敦は天、すなわち「人間や宇宙に対する信頼」を自力で築き上げたというのである⁴。しかし「李陵」における天は、二通りの読み方が出来るのではないだろうか。もちろん李陵にとっては、蘇武の漢への帰還が実現したことは、天が蘇武の所業を見ていたからであり、天は「肅然として懼れ」る対象なのである。しかし「李陵」のもう一人の主人公である司馬遷にとってはどうだろうか。本稿の結論にて詳述するが、司馬遷は天に強い疑問を抱いている。この事実は併せて考えるべきではないだろうか。

これらの先行研究を踏まえたうえで、本稿では次のように考察を進める。
 第一章では原典である『左伝』と「牛人」との対比を行って差異を明らかにする。
 第二章ではその差異から「牛人」の天や天命に関する考え方を明らかにする。
 第三章では、『左伝』豎牛の乱の一連のエピソードから、「牛人」に用いられなかった部分を取り上げ、中島敦の「牛人」における天あるいは天命に対する考え方を明らかにする。
 終章では本稿で論じたことを整理し、今後の課題として考えられるものを提示する。

第一章 「牛人」と『左伝』叔孫豎牛の乱との相違点

中島敦は『左伝』の該当箇所をかなり忠実になぞっているが、やはり細部には中島敦によって手が加えられている。ここでは「牛人」と『左伝』とを比較して中島の手によって原典が書き換えられた部分を指摘し、中島の意図を考察する。

『左伝』と「牛人」の該当箇所を箇条書きにまとめると、次のとおりになる。なお.....は『左伝』に見えて「牛人」には見えない個所、.....は「牛人」に見えて『左伝』に見えない個所である。また 1、2 などの数字は『左伝』を基準として付したものであり、A、B などのアルファベットは「牛人」のみに見られる記述である。

『左伝』	「牛人」
1 叔孫豹はかつて兄を避けるために斉を訪れる際、庚宗の地で婦人と出会い、親しくなる。斉では国氏から妻を迎えて孟丙・仲壬という二人の子を得る。	1 叔孫豹はかつて乱をさけるために斉に奔った。庚宗の地で美婦と一夜をともにし、翌日斉に入った。斉では国氏の娘を娶り、二児をもうけ、 <u>かつての契りは忘れてしまった。</u>
2 天が自分を押しつぶそうとするが、黒い顔で肩がかがまり、目が窪んで豚のような	2 不吉な予感の中、突然真黒な天が天井を押しつけて天井が下降するが、色の黒い軀

⁴ 参考：勝又浩『中島敦の遍歴』（筑摩書房、2004／2005 年）p.185～197

口をした男が天を押しつけてくれるという夢を見る。従者の中にこの男に似た者を探すが、いない。	癭で眼が深く凹み獣のように突出た口をした、牛に似た男が上の重みを支え、また叔孫豹の胸を撫でて圧迫感を失わせるという夢を見る。従者の中にこの男に似た者を探すがおらず、<u>齊の都に出入りする人にも気をつけてみるが、出会わない。</u>
3 兄が齊へと逃れてきて、兄と入れ替わりに魯へと帰国する。	3 再び故国に政変がおこり、叔孫豹は帰国する。 4 大夫になるに及んで妻子を呼び寄せようとしたが、妻はすでに齊の大夫某と通じていて、<u>夫のもとに来ようとし</u>ない。二人の息子だけが父の所へ来る。
4 以前齊に行くときに泊った婦人が、婦人の息子とともに雉を献上してくる。その息子は夢に見た「牛」にそっくりで、名前を尋ねると「牛」であった。この子を豎（小姓）として使う。豎牛は成長すると家政を任せられた。 齊の国姜との間にできた二人の息子については、先に魯に帰国した叔孫豹が国姜を呼び寄せようとするとしてすでに齊の大夫・公孫明の男の妻になっていた<u>ので叔孫豹が腹を立て、孟丙・仲壬は大きくなってからやっと魯に迎えられた。</u>	4 すっかり忘れていた相手である庚宗の地の女が雉を手土産に訪ねてくる。倅がおり、叔孫豹の子であるという。夢の中で助けてくれた黒い牛男そっくりで、名前は「牛」といった。母子は引き取られ、少年は豎に加えられた。<u>いつも陰鬱な顔をして少年仲間の戯れにも加わらない。主人以外の者には笑顔一つ見せない。</u>叔孫にはかわいがられ、長じては叔孫家の家政一切の切廻しをするようになった。 A 豎牛は偶に笑うとひどく滑稽な愛嬌に富んだものに見え、こんな顔つきの男に悪くみなど出来そうもないという印象を与える。目上の者にはこの顔を見せる。儕輩が恐れるのは、仏頂面をして考え込むときの、一寸人間離れした怪奇な残忍さを呈した顔である。豎牛は意識せずに二つの顔の使い分けができるらしい。 叔孫豹は豎牛を無類の秘書乃至執事と考えているが、後継にしようとは考えていない。豎牛も心得ており、齊から迎えられた孟丙・仲壬には懇懃を極めた態度をとる。孟丙・仲壬も豎牛との人柄の相違に自信を持っており、父の寵の厚いのに大して嫉妬を覚えない。
5 丘薺での狩のあと、叔孫豹が病を得る。	5 丘薺での狩のあと、叔孫豹が病を得る。身の回りの世話などが一切豎牛に任され

	る。豎牛の孟丙等に対する態度は愈々遜ってくる一方である。
6 豎牛は叔孫家を攪乱して手に入れようとし、まず孟丙に盟約を強制したが従わない。豎牛は、叔孫豹が孟丙のために鑄させた鐘が鑄あがった祝いの宴会の日取りについて、孟丙が叔孫豹に問うたのを取り次がずに父子に軋轢を生じさせ、また豎牛が叔孫豹に、孟丙が宴会の席に叔孫豹から国姜を奪った公孫明を招いたと告げた。叔孫豹は怒り、孟丙を殺すよう命じた。	6 叔孫が寝付く以前に孟丙のために鐘を鑄造させ、病に伏してから漸く出来上がった。宴会の日取りについての孟丙からの問いを豎牛が取り次がず、父子の間に軋轢を生じさせ、さらに宴会に国姜の関係者を招いたと、不義を働いたかつての妻の話を持ち出して機嫌を悪くさせ、最終的に叔孫豹に孟丙を殺させた。
7 豎牛は、今度は仲壬に盟約を強制したが従わない。そこで仲壬が魯公にいただいた玉環について叔孫豹に報告する言葉を取り次がず、父の許しを得ずに公に目通りして玉環を身につけていると叔孫豹に誤解させ、仲壬は斉に奔る。	7 大人しい青年の仲壬は、魯公にいただいた玉環を父の許しを得ずに身につけては悪かろうと叔孫豹に報告しようとしたが、豎牛が仲壬の報告を取り次がず、父の許しを得ずに公に目通りして玉環を身につけていると叔孫豹に誤解させ、仲壬は斉に奔る。
8 病気が重くなり、叔孫豹は仲壬を呼び寄せようとしたが、豎牛は口では承知しながら呼び寄せない。	8 病気が重くなり、後継問題を考えた叔孫豹は仲壬を呼び寄せようとしたが、豎牛は仲壬に使いを出さず、非道の父のもとには戻らないという返事だったと復命する。叔孫豹は豎牛の言葉を疑う。豎牛は明らかな侮蔑の表情、残忍な顔で叔孫豹を冷然と見下ろす。
9 叔孫氏の宰の杜洩が見舞いに来る。叔孫豹は豎牛を殺せというが、杜洩は請け合わない。	10 次の日から豎牛は病人に食を進めなくなった。
10 豎牛は叔孫豹のために準備された食事を叔孫豹に食べさせなくなる。十二月癸丑の日、叔孫豹は何も食べなかった。	9 叔孫氏の宰の杜洩が見舞いに来る。叔孫豹は豎牛を殺せというが、杜洩は請け合わない。客が去ってから始めて、牛男の顔に会体の知れぬ笑が微かに浮かぶ。

	B 叔孫豹は夢（あるいは幻覚）を見た。重苦しく淀んだ不吉な予感に満ちた部屋の空気の中に、輝きの無い・いやに白っぽい光が見える。寝ている真上の天井がいつかの夢のときと同じように下降する。しかし黒い牛男は今度は助けてくれない。 夢から覚めると、夢で見たのとそっくりな光景。豎牛の冷酷な表情に、叔孫豹は懼れを抱く。怒りは運命的な畏怖感に圧倒されてしまった。
11 乙卯の日、叔孫豹は亡くなった。	11 三日後、叔孫豹は飢えて死んだ。

あらすじを比較してみると、明らかに異なる点がいくつかある。以下に列挙してみる。

- ① 1、3 で、『左伝』に書かれていた兄と叔孫豹とに関するお家騒動について、「牛人」では単に「政変」として詳細を省いてある。
- 物語に異なる要素を入れないために省いたと思われる。
- ② 2 において叔孫豹が見た夢で、『左伝』では牛に似た男が天を支えてくれたというのに対し、「牛人」では天に押されて下降してくる天井を牛に似た男が支え、さらに叔孫豹の胸を撫でて圧迫感を取り去ったとしてある。
- B にて再度見た夢の内容と対比させて B の残酷さをより際立たせるために、牛に似た男が楽にしてくれたことを加えたと思われる。
- ③ 4 にて、齊での妻・国姜（「牛人」では国氏）が他の男（齊の大夫・公孫明）の妻となってしまうことから、『左伝』では妻に怒った叔孫豹が孟丙・仲壬の二人の息子をすぐに引き取らずに大きくなって初めて魯に迎えたとされているのに対し、「牛人」では妻は魯に来ようとしなかったために二人の息子だけを引き取ったとしている。
- 『左伝』では妻への怒りが子供へも及んでいるのに対して、「牛人」では怒りの対象が妻のみに向いている。ここから、「牛人」では叔孫豹が二人の息子を遠ざける理由は、本来は息子たち本人に無かったことを強調しているのではないかと推測できる。
- ④ 同じく 4 には、「牛人」のみに豎牛の容貌が記されている。これは A に関わる事柄であるため後述する。
- ⑤ 『左伝』にはない A の部分が「牛人」に挿入される。A は豎牛が自然に二つの顔を使い分けることができるということと、叔孫豹は豎牛を後継ぎとは考えないし、孟丙・仲壬も豎牛をライバルとしては見ないということが述べられる。
- ⑥ 5 において叔孫豹が病を得、叔孫豹の身の回りの世話を豎牛が行うようになるが、「牛人」においては孟丙・仲壬の二人に対する豎牛の態度はますます遜ってくるとされている。これは 6、7 に関係する。
- ⑦ 6、7 は豎牛が本性を現し始める部分である。しかし『左伝』でははっきりと叔孫家を乗っ取ろうとして孟丙・仲壬に盟約を強制し、拒んだために二人を取り除くというこ

とになっているのに対し、「牛人」では豎牛はあくまで父にも孟丙・仲壬にも従順な態度をとっており、誰にも疑われないように振舞っている。

- ⑧ 8 で叔孫豹は斉に奔った仲壬を呼び戻すことを豎牛に命じるが、豎牛は実行しない。『左伝』ではこの場面はここで終わり、次の杜洩が見舞いに来る場面で初めて豎牛を疑っていることが明らかになる。「牛人」では、仲壬について復命した豎牛の言葉を叔孫豹が疑い、ここにおいて豎牛は叔孫豹に本性を見せることになっている。
- 豎牛の変貌を挿入することにより、豎牛の残虐性を強調していると思われる。
- ⑨ 9 と 10 とについては、「牛人」において一部順番の入れ替えが見られるが、これは『左伝』において叔孫豹が杜洩に飢えと渴きを訴えたことをより印象付けようとしての移動ではないだろうか。ただ『左伝』では杜洩が見舞いに来た日にはまだ絶食状態ではなく、その次に記された「十二月癸丑の日」から絶食となる。一方「牛人」では杜洩が来る前から絶食であるという違いがある。
- ⑩ B という『左伝』には無い部分が挿入される。叔孫豹は 2 で見たのとそっくりな夢を見るのだが、今度は「輝きの無い・いやに白っぽい光」が見え、また牛男は助けられない。目覚めると夢と同じ光景が見えるのだが、そのときの牛男の表情に、叔孫豹は怒りではなく懼れ、運命的な畏怖感を抱くのである。

これらの相違点を読み進めていくと、「牛人」は『左伝』に見えないある意図をもって描かれていることが分かる。意図を読み解く上で特に重要なのは、次の三点ではないだろうか。一つ目は④⑤の豎牛の容貌に関する叙述、二つ目は⑥⑦の孟丙・仲壬を除くことに関する豎牛の関わり方、そして三つ目は⑩の夢の場面の挿入である。次章では、この三点における相違から何が読み取れるのかということについて論ずる。

第二章 相違点から読み取れるもの

ここでは、第一章において指摘した三点について詳細に考察を進める。

第一節 豎牛の容貌に関する叙述

『左伝』では、豎牛の容貌に関しては叔孫豹が見た夢の中にのみ記述されるが、「牛人」では第一章に指摘した④⑤にて詳細に述べられている。特に『左伝』には無い A の部分には、豎牛の特異な性質を読み取ることができる。

「牛人」には、豎牛の容貌について次のような記述がなされている。

眼の凹んだ・口の突出た・黒い顔は、極く偶に笑ふとひどく滑稽な愛嬌に富んだものに見える。こんな剽軽な顔付の男に悪企など出来さうもないといふ印象を與へる。目上の者に見せるのは此の顔だ。佛頂面をして考へ込む時の顔は、一寸人間離れのした怪奇な残忍さを呈する。儕輩の誰彼が恐れるのは此の顔だ。意識しないでも自然に此の二つの顔の使ひ分けが出来らしい。

豎牛は主人すなわち叔孫家の当主である叔孫豹と、二人の息子（豎牛にとっては腹違いの弟にあたる）に対しては「悪企など出来さうもないといふ印象を与へる」顔を見せるのだが、同じ小姓仲間には「一寸人間離れのした怪奇な残忍さを呈する」顔を見せている。のちに叔孫豹がいよいよ体が動かなくなるまで豎牛の悪意の行いに気付かなかったのは、この使い分けのせいである。しかもこの二つの顔について豎牛は「意識しないでも自然に此の二つの顔の使ひ分けが出来る」のである。

叔孫豹だけでなく孟丙・仲壬の二人も豎牛の残忍さに気付いていないことは、⑥⑦で明らかにする。

第二節 叔孫豹と二人の息子との軋轢を生じさせる部分の記述

⑥と⑦とは、『左伝』における豎牛と孟丙・仲壬との関係と、「牛人」におけるそれとの違いが最も明瞭にあらわれている。

5の叔孫豹が病を得る場面で、「牛人」では次のように付け加えられている。

病中の身の廻りの世話から、病床よりの命令の傳達に至る迄、一切は豎牛一人に任せられることになった。豎牛の孟丙等に對する態度は、しかし、愈々遜ってくる一方である。

『左伝』では叔孫豹が病気になると、豎牛はさっそく叔孫家を我が物にしようとして、孟丙・仲壬に働きかける。しかし「牛人」ではあくまで主人である叔孫豹と孟丙・仲壬兄弟に対して、表面的な忠実さを保ち続けるのである。だからこそ⑦に指摘したように、父親である叔孫豹と孟丙・仲壬との間に軋轢が生じるときにも、叔孫豹・孟丙・仲壬の三人は豎牛がそれを仕組んだとは知らないままだということが分かる。

第三節 豎牛の本心の露呈の瞬間

8において叔孫豹は仲壬を斉から呼び戻そうとするが、豎牛は命令を実行しない。⑧に指摘したように、『左伝』では叔孫豹が豎牛の本心に気付いた瞬間をはっきり指摘していないのに対し、「牛人」ではその瞬間を明らかに描写する。

此の頃になつて漸く叔孫にも、此の近臣に對する疑ひが湧いて來た。汝の言葉は眞實か？ と屹として聞き返したのは其の爲である。どうして私が偽など申しませう、と答へる豎牛の唇の端が、其の時嘲るやうに歪んだのを病人は見た。こんな事は此の男が邸に來てから全く始めてであつた。カツとして病人は起上らうとしたが、力が無い。直ぐ打ち倒れる。其の姿を、上から、黒い牛の様な顔が、今度こそ明瞭な侮蔑を浮かべて、冷然と見下す。儕輩や部下にしか見せなかつたあの残忍な顔である。

叔孫豹が豎牛の行動に気付いた瞬間、豎牛の表情が一変するのである。「儕輩や部下にしか見せなかつたあの残忍な顔」を、叔孫豹に見せる。そしてここから、豎牛が「冷笑」「會體の知れぬ笑」を見せ始めるのである。

第四節 叔孫豹の二度目の夢

叔孫豹が飢えを訴えたことに対して見せた「冷笑」、見舞いに來た家宰の杜洩が去ってから見せた「會體の知れぬ笑」という冷たい笑みの表情が変化するのが、叔孫豹が見た二度目の夢あるいは幻覚の中である。夢の中の光景は「重苦しく淀んだ・不吉な豫感に満ちた部屋の空気の中」に、「輝きの無い・いやに白っぽい光」が「音も無く燃えてゐる」のであり、かつての夢と同じように天井が下降を始める。

傍を見ると黒い牛男が立つてゐる。救を求めても、今度は手を伸べて呉れない。黙つてつつ立つた儘にやりと笑ふ。絶望的な哀願をもう一度繰返すと、急に、慍つたやうな固い表情に變り、眉一つ動かさずに凝乎と見下す。

夢を見る前までは「笑い」であったものが、夢の中で「慍つたやうな固い表情」へと変化する。「眉一つ動かさずに凝乎と見下す」その顔は、正気に返ったときに見た豎牛の「人間離れのした冷酷さを湛え」た顔なのである。

そして重要なのが、この豎牛の表情に対する叔孫豹の感じ方である。

其の貌は最早人間ではなく、眞黒な原始の渾沌に根を生やした一個の物のやうに思はれる。叔孫は骨の髄まで凍る思ひがした。己を殺さうとする一人の男に對する恐怖ではない。寧ろ、世界のきびしい悪意といった様なものへの、遜った懼れに近い。最早先刻迄の怒は運命的な畏怖感に壓倒されて了つた。今は此の男に刃向うはうとする氣力も失せたのである。

叔孫豹は豎牛の表情を「眞黒な原始の渾沌に根を生やした一個の物」のやうに思う。そして豎牛を通して、「世界のきびしい悪意といった様なものへの、遜った懼れ」への「運命的な畏怖感」を感じるのである。

第五節 豎牛の存在の不可思議さ

ところで『左伝』では、豎牛は叔孫豹が亡くなったあと、積極的に叔孫家に乗っ取る画策を行う。しかし豎牛自身が擁立した叔孫昭子によって身を危うくし、最終的に孟丙・仲壬らの息子たちによって殺されてしまう。『左伝』に見られる豎牛のこのような人間くさく生々しい欲望は、『左伝』にて「牛人」の原典とされた部分にも明らかに見られる。それは豎牛が叔孫家を手に入れようとして、孟丙や仲壬に盟約を強制しようとするという行動である。すなわち『左伝』を読めば、豎牛が孟丙を害せしめ仲壬を放逐せしめ、また叔孫豹本人を死に至らしめた目的は、明らかに叔孫家に乗っ取ろうとすることだったのが分かる。

一方「牛人」においては、豎牛の目的は最後まで分からない。むしろ叔孫豹個人を死なせることそのものが目的であるようにも思えるのである。このやうに豎牛が不可思議な存在となっているのは、明らかに叔孫豹が最後に感じたものが「世界のきびしい悪意といった様なものへの、遜った懼れ」「運命的な畏怖感」とされているからであろう。もともと「人間離れのした怪奇な残忍さを呈する」表情を持っていた豎牛が、ついに人間ではなくなっ

たとも感ぜられるのである。

しかしここで、「牛人」における豎牛はもとより悪意であったと結論づけるには早いのではないだろうか。なぜならば物語のはじめに叔孫豹が見た夢では、豎牛は「手を差伸べて、上からのし掛かる無限の重みを支へて呉れ」たのであり、しかも「もう一方の手で胸の上を軽く撫でて呉れると、急に今迄の壓迫感が失つて了つた」からである。豎牛の夢の中の態度が、最初の夢と最後の夢とでは変化していることは注目に値する。すなわち、この物語は単なる子による父への復讐物語ではないのである。

第六節 小結

ここで第二章を振り返り、中島敦が創作した点を整理してみたい。

第一節では豎牛自身も意識せずに二つの顔を使い分けることができ、それゆえ主人である叔孫豹や孟丙・仲壬たちもなかなか豎牛の残忍さに気付かないということについて述べた。

第二節では、叔孫豹と孟丙・仲壬二人の仲は、彼ら自身が気づかないうちに豎牛によって裂かれてしまうということについて述べた。『左伝』では豎牛がはっきりと叔孫家を乗っ取ろうとして二人の息子に働きかけるのに対し、「牛人」では孟丙・仲壬二人は、父との仲を裂かれた理由はおろか、それが豎牛の仕業であるということすら分からないままなのである。

第三節では、「牛人」には叔孫豹が豎牛の仕業に気付いたときにはじめて、豎牛が冷酷な表情を見せるということについて触れた。これをきっかけに豎牛の叔孫豹に対する行動は変化するのである。

第四節では、『左伝』には見られない最後のシーンについて触れた。叔孫豹は豎牛に怒りを感じるのではなく、懼れや畏怖感を感じるのである。

第五節では、豎牛の存在の不可思議さについて触れた。『左伝』では明らかになっている「叔孫家を乗っ取る」という豎牛の目的が、「牛人」では読み取れないのである。また夢の中の豎牛は、一度目の夢では叔孫豹を助けてくれたのに二度目の夢では助けてくれない。この態度の曖昧さも、豎牛の存在の不可思議さを助長している。

これらの点からはっきりしてくるのは、叔孫豹や孟丙・仲壬は知らないうちに豎牛の手によって破滅させられてゆくことと、豎牛の行動の目的とがはっきりしないという二つである。

豎牛の目的という視点で考えると、確かに叔孫豹には豎牛によって死に至らしめられる理由があるように見える。それは、物語の冒頭で、叔孫豹が婦人と親しくなったものの、斉で妻を娶り二人の子が生まれるに及んで「曾ての路傍一夜の契などはすっかり忘れ果てて了つた」ということである。叔孫豹が当主となるに及んで婦人が豎牛を連れて訪ねてきて、豎牛は寵愛されるようになる。しかし豎牛を後継ぎにすることは全く考えられていない。実は、『左伝』を読むと分かることであるが、豎牛と孟丙・仲壬のほかに、叔孫豹にはもう一人、叔孫昭子という息子がいる。叔孫豹の死後、豎牛が昭子を担ぎあげて後継ぎに据えたのだが、その昭子自身が「豎牛、叔孫氏に禍し、亂をして大いに従はしめ、適を殺

して庶を立つ。またその邑を^{ひら}抜きて、將に以て罪を^の赦れんとす。罪、焉より大なるは莫し。

必ず速やかにこれを殺せよ」(『左伝』昭公五年)と命令を下す。すなわち叔孫家を乱した罪の中に、孟丙・仲壬という嫡子を殺して昭子という庶子を立てたことが含まれている。したがって、庶子である豎牛が後継ぎになることは本来ならば有り得ないのである。

一方小説ではわざわざ「秘書乃至執事としては無類と考へてゐたが、魯の名家の當主とは、其の人品からしても一寸考へにくいのである。…(中略)…彼等(孟丙・仲壬。筆者注)の方では、幾分の不氣味さと多分の輕蔑とを此の男に感じてゐるだけだ。父の寵の厚いのに大して嫉妬を覺えないのは、人柄の相違といふものに自信をもつてゐるからであらう。」とする。つまり、叔孫豹も孟丙・仲壬も、豎牛は本来ならば當主となることのできる血筋であるにも関わらず、豎牛が叔孫家の當主となる可能性は全く考えていない、という書き方をしている。すなわち豎牛の母と親しくしたことを忘れ、再会してもすぐには思いださず、また豎牛を後継ぎにすることを全く考えていない叔孫豹が豎牛に恨まれる理由は、「牛人」には存在するのである。

では「牛人」はないがしろにされた息子の復讐物語かということ、それだけではない。復讐物語と解釈するのでは、夢の中の豎牛の変貌が説明できないのである。

また復讐物語と解釈できないもう一つの理由がある。それは『左伝』に見られるあるエピソードが、「牛人」には採用されていないということである。

第三章 叔孫豹の運命

第一節 叔孫豹についての占いの記述

『左伝』にあつて「牛人」にない記述とは何であろうか。実は『左伝』では、豎牛に関する一連の記述のあと、次のような事実が明かされている。叔孫豹が生まれたとき、父親が叔孫豹について占った結果を、卜楚丘という人物が次のように読み解いたという。

楚丘曰、是將行、而歸爲子之祀。以讒人入。其名曰牛。卒以餒死。(『左伝』昭公五年)

楚丘曰く、これ將に行くも、子の祀の爲に歸る。讒人を以て入る。其の名を牛と曰ふ。卒するに餒死を以てす。

楚丘が言った。「この人は出奔するでしょうが、あなたの祀りをするために帰ってきます。讒人を伴って帰ります。その名を牛と言います。亡くなるときは、飢えて亡くなります。」

つまり「魯国を出るが再び帰ってくる。牛という名前の良からぬ人を伴ってくる。亡くなるときには飢えて亡くなる」という叔孫豹がたどる運命は、生まれたときに既に占いによって明らかにされていたのである。

一方「牛人」には、この占いのくだりが無い。それゆえに「牛人」を読むと、運命が少しずつおかしくなっていく、最終的に、はじめの夢の中では助けてくれた豎牛が最後は叔孫豹を死に至らしめるという流れが際立つのである。豎牛の目的は単なる父への復讐ではない。また中島敦は『左伝』に書かれた「乗っ取り」の要素を省いていることから、叔孫家を手に入れることも豎牛の目的ではないと考えられる。

中島敦は夢の中の豎牛の変化によって、叔孫豹の運命を読者に感じさせている。敢えて

『左伝』にあった占いの話を出さないのは、本人の選んだ行動によって運命が変化してゆくことを印象づけるためではないだろうか。「牛人」の叔孫豹はなぜ豎牛に殺されなければならないのか分からず、それゆえに豎牛が「人間離れのした冷酷さを湛へて、静かに見下」しているのに対して、自分のかつての所業を反省することなく「世界のきびしい悪意といった様なものへの、遜った懼れ」「運命的な畏怖感」を感じるのである。実は叔孫豹が豎牛の母と親しくなり、豎牛をもうけるということが反省点なのであるが、物語の中の叔孫豹はそのことに気付かない。

また豎牛が目上に見せる顔と儕輩に見せる顔を「自然に…（中略）…使ひ分けが出来るらしい」という記述、叔孫豹や孟丙・仲壬が気付かないうちに豎牛によって矛盾を生じてゆくという設定は、豎牛も含めた当の本人たちが知らないうちに運命が動いてゆくという、運命の不可知性を強調しているのではないだろうか。

第二節 春秋時代の「天」「天命」観

運命を不可知なものだとする捉え方は、叔孫豹らと同じ春秋時代に生きた思想家である孔子の、弟子たちに下された天命に対する態度と似ている。孔子の弟子の冉伯牛は徳行で知られた人であった（『論語』先進第十一）が、この冉伯牛が重い病にかかったときには孔子は「命なるかな」と慨嘆する（『論語』雍也第六）。また孔子が弟子の中で「學を好む」（『論語』先進第十一）と認めた顔回が亡くなったときには「噫、天 予を滅せり、天 予を滅せり。」（論語先進第十一）と嘆いている。しかし孔子は天を怨むことはなく、絶対的な信頼を置いている。「天を怨みず、人を尤（とが）めず、下學して上達す。我を知る者はそれ天か。《天を怨まず、人をとがめず、身近なことを学んで高尚な道に達する（ことを目指す）。このような自分を認めてくれるものは、天だろうね。》」（『論語』憲問第十四）という章には、時に過酷な運命を授ける天を怨む気持ちを抱かず、自分の修養につとめる孔子自身を、天こそが理解してくれるであろうことを言っている。また衛の靈公の夫人であり、品行が悪いという評判があった南子に面会したのを子路が不満に思ったとき、孔子は「予が否とする所のものは、天これを厭（す）てん、天これを厭てん。《私が道に外れたことがあれば、天が見捨てるであろう、天が見捨てるであろう。》」（『論語』雍也第六）とも言っている。天はときに人間の予測のつかない命を下す。天のもとにおいて、孔子はひたすら謙虚であった。「罪を天に獲れば、禱るところなし。」（『論語』八佾第三）と言われるように、天に恥じる行いをしたら、ほかに祈るところすら無いのである。祈りの対象である天の所業には、怒りを抱くことはない。

第三節 小結

上記したように、春秋時代の天に対する態度とは、次のようなものであった。すなわち天は時として残酷な命を下す。しかし人間はあくまで天に対して謙虚で、天を疑うことはないのである。これを踏まえて考えれば、叔孫豹が「先刻迄の怒は運命的な畏怖感に壓倒されて了つた」という瞬間こそ、豎牛という一人の人間が自分を殺そうとしているのは実に天命であると気付いた瞬間に他ならないのである。

終章 まとめ

本稿で論じてきたことをまとめると、以下のようになる。

第一章では『左伝』の豎牛の乱に関する記述と「牛人」との記述を比較し、相違点を明らかにした。

第二章では第一章にて明らかにした相違点をもとに、「牛人」が単なる庶子による父親への復讐物語ではないこと、また「牛人」においては、叔孫豹や孟丙・仲壬、また時には乱の中心人物である豎牛自身すら気づかぬうちに叔孫家が破滅へ向かっていることを明らかにした。

第三章では、第二章にて論じたことと『左伝』に見られる叔孫豹の運命に関する占いのくだりを中島敦が省いたということとを踏まえて、春秋時代の天や天命観を参考にすることによって、中島敦の「牛人」における豎牛の行動の背後には、逆らうすべのない天命があるのではないかということを示唆した。

以上に述べたことを踏まえて、本稿をまとめたい。

「牛人」では、豎牛を含めた叔孫家の人物全ての背後に天が存在し、叔孫豹が死に至らしめられたのは運命であるということを明らかにした。この結論は中島敦が「牛人」を書くにあたって、『左伝』に記されていた叔孫豹に関する占いの記述を省き、叔孫豹や豎牛、孟丙・仲壬たちでさえ気づかぬうちに破滅へと導かれていったという方向へ創作の手を加えることによって強調されていたのである。すなわち「牛人」においては、叔孫豹が死ななければならなかったのは天命であった。天というのは不可知なものの、時として人間に過酷な運命を下す存在である。しかし人間は天を恨むことはなく、あくまで懼れつつしむのである。このような運命を招いた原因は、実は叔孫豹が豎牛の母親と親しくなり、豎牛をもうけたという行動そのものにあった。この因果応報とでもいうべきテーマが読み取れることは確かである。しかし因果応報は「牛人」においては小さなテーマであり、その奥に流れている運命の不可知性と天に対する懼れとが、真のテーマではないだろうか。

ところで、天の不可知性、また天命が時として残酷であるというテーマは中島敦の他の作品にも見られる。ゆえに今後の課題として、中国古代の天命観という共通したテーマのもとに扱うことができる作品群について考察してゆくことが考えられる。

「牛人」と同じ春秋時代の中国を舞台にした「盈虚」では、主人公の蒯聵が悪夢を占うことによって運命を知るという一節があり、また蒯聵の人生自体が運命によって翻弄されている。さらに蒯聵も、かつて自分の勝手に髪を切らせた女性の夫の報復に遭って命を落とす。蒯聵は叔孫豹と同じく、天あるいは運命を恨み、疑問に思うことはない。また叔孫豹も蒯聵も、ぞんざいに扱った相手やその身近な人物から報復を受けており、自分の行いが悪い運命を導くという因果応報という小テーマも共通している。

しかし、これも同じ春秋時代の孔子の弟子である子路を主人公にして書かれた「弟子」のテーマは、少々異なっている。子路は孔子の不遇という運命に接して天に疑問を持つ。また子路自身も、運命の大きな流れによって命を落とす。「弟子」においては、子路にも孔子にも、不運に見舞われるような原因は見当たらない。因果応報という小テーマは「弟子」には見られないのである。

さて、天あるいは運命という観点から考えると、これらの作品の延長上にあると思われるのが「李陵」である。漢の武帝のために戦いに出た李陵は、かえって武帝によって家族を誅せられる。また李陵をかばった司馬遷は、正しいことをしたにも関わらず宮刑に処せられる。このような不運に関して想起せられるのが、司馬遷自身の「天道は是か非か」という、『史記』伯夷列伝に記された言葉である。人道的に正しいことを行ったにも関わらず餓死という結末を迎えた伯夷・叔斉という兄弟の運命について、司馬遷は孔子の弟子の顔回の早世を例に挙げて天の是非を問う。残酷な運命を下される原因が無いにも関わらず不運である人々を通して司馬遷が投げかける天への疑問は、実は春秋時代、特に「弟子」の舞台である孔子門下には決して見られないものである。思想史上の天あるいは天命観と、中島敦の作品における天あるいは天命観との差異にこそ、中島敦個人の考えが読み取れるのではなかろうか。

「弟子」「李陵」には、「牛人」「盈虚」には見られなかった天への激しい疑問が見られる。天への疑問という観点から『左伝』や『論語』、『史記』などの原典と比較しつつ作品を読み進めていき、また中島敦自身の背景をも含めて中島敦の小説のテーマを見出してゆくことが、今後の課題である。

参考文献

- 中島敦『中島敦全集第一巻』（筑摩書房、昭和 51／62 年）
木村瑞夫『論攷 中島敦』（和泉書院、2003 年）
渡邊一民『中島敦論』（理想社、2005 年）
勝又浩『中島敦の遍歴』（筑摩書房、2004／2005 年）
竹添進一郎『漢文大系（十一）左氏會箋』（富山房、1911 年）
国立編譯館主編『十三經注疏 第十五冊 春秋左傳正義』（新文豐出版公司、中華民國 90 年）

[the Heaven or the Fate in *Gyujin* by NAKAJIMA Atsushi]

[ARAKI Yukiha・西南学院大学非常勤講師・西九州大学非常勤講師・中国思想・比較文化]